

序

平素からりんくう総合医療センターの運営に対しましては甚大なご支援を賜り、心から感謝申し上げます。このたび平成28年度病院年報が出来上がりましたので、お届けします。

平成23年4月に当センターが地方独立行政法人化してから、5年間の第1期中期計画が平成27年度に終了し、平成28年度は第2期目の初年度となった年でした。

振り返りますと、この年は、診療報酬改定の年であるとともに、年度初めから例年とは違う患者の流れがあって、さらに、4月14日には熊本地震があり、当センターからもDMATを派遣しましたが、何かと当初から波乱を感じさせる年でもありました。

さて、この第1期の5年間には、ICU・病室の改築、医療機器の更新、電子カルテの導入、そして、外国人患者受入れ医療機関の認証、大阪府立泉州救命救急センターの移管・統合、なすびんネットの運用開始、りんくう教育研修棟・泉州南部卒後研修シミュレーションセンター(サザンウィズ)の開設等々、基金などを有効に活用した病院改革を進める一方で、ESCO事業や照明機器のLED化など、種々の経費削減策にも取り組んだ5年間でした。その経過の中で、医師・看護師等の医療従事者の確保状況は改善し、職員の活気が戻り、救命救急センターとの統合などによる効果で医療の質は著明に向上しました。

一方で、収益は増加傾向を示すものの、平成26年度の消費税増税と、医療費高騰に関連する診療報酬マイナス改定等の施策の影響などにより、材料費、人件費は上昇し、財政的には非常に厳しい状況となりました。その結果、平成28年度は、最終的には財政立て直しと経営安定化を目指した財政再建プロジェクトを立ち上げることを決断した年となりました。

特に再建項目の一つであった救急患者の受入れ強化を図るため、10月から病院の救急外来に救急救命医が常時支援する体制を開始したところ、2次救急患者の応需率が大きく向上し、病床管理の工夫も相まって、90数%を超える病床稼働率を維持することが可能になった年でもありました。さらに、念願の消化器内科医2名が就任して精力的な診療を開始し始めた年度にもなっています。

様々な施策と急速な医療改革が進められている中、南泉州地域における地域包括ケアシステムの構築に向けて、皆様方との密な連携をさらに深め、より良い医療環境を整えるべく、病院職員が一丸となって邁進する所存です。

この地域で日頃からお世話になっております皆様方、また、常に何かとご支援を頂戴している大学、諸機関の方々、今後とも引き続き、当センターに対する益々のご指導とご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

理事長 八木原 俊克

序

平成28年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから6年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、4年目の年でした。平成27年8月より小生が病院長を拝命し、病院の組織的な改革を行ってきました。病院運営会議、診療科部長会、幹部会等の運営手法を新しい考え方で変更するとともに、病院長自らが大阪大学大学院医学系研究科総合地域医療学寄附講座の特任教授を兼任して、大阪大学を中心とする各講座との関係を再構築し、各診療科の医師の確保に奔走してきました。さらに、泉佐野泉南医師会を中心とする多くの医療関係の方々とも協調して、当センターの運営を改革しようとしております。幸いにも医師の人的スタッフは徐々に充実してきており、長年の懸案事項であった消化器内科の常勤医師もやっと肝臓専門医と内視鏡専門医の合計2人に赴任して頂くことができました。また、さらに内分泌代謝内科の常勤医も招へいし、お陰様で診療面ではかなりレベルアップして充実しつつあります。一方、初期研修医の応募者も4倍以上の倍率でかなり多くなり、競争率が高くなった結果、極めて優秀な人材が当院で初期研修を開始して頂けるようになっていきます。

小生が赴任後に最も重要視した点は、学術・研究活動です。これまで、当院の学会発表や論文発表はそのレベル、数ともに十分とは言えない状況であったと思われませんが、泉州南部地域にとどまらず、大阪から世界に発信できる臨床と研究ができるセンターとして、少しずつレベルアップしつつあると思っています。その一貫として、若い研修医には国内のみならず国際学会でも発表して頂き、また英文論文も発表できるように指導体制を整えてきました。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター』を利用して、コメディカルスタッフも含む臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実施してきました。この斬新な試みにより将来有望なスタッフを全国から集め、泉州南部地域の医療を支える医療従事者を育成し、究極的にはこの地域の医療水準の向上に大きく貢献できるのではないかと考えています。

一方、当センターは特定感染症指定病院、災害拠点病院、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、泉州救命救急センターなど、様々な医療機能を有した高度急性期病院で、市立貝塚病院との泉州広域母子医療センターの共同運営や、泉州南部における病病連携・病診連携をより迅速にする新たな診療情報連携システム「なすびんネット」も活発に利用されています。また、関西国際空港の対岸という土地柄、国際診療の領域でも先駆的な取り組みを行っています。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、その診療への対応が求められているだけではなく、大阪在住の多数の外国人の診療も担っております。最近では重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備えて、我が国に4病院しかない特定感染症指定医療機関の1つとして、関西の砦としての大きな役割も求められています。さらに、関西空港に最も近い病院として、海外からの当院への受診も増えており、今後はインバウンドの国際診療がさらに充実できるように、国際診療科の移転も行いました。

皆様ご存知のとおり、都道府県が主体となって「地域医療ビジョン」が策定され、これまで以上に地域完結型医療の実践が求められています。当地域は従来から非常に病診連携・病病連携が緊密に行われてきた地域ではありますが、当院では消化器内科や眼科、放射線科等、一部診療科の医師不足により、あらゆる病態に対応できるわけではないという現実の重要課題があり、また病院の赤字問題も大きく負担となっておりますが、今後も南泉州地域で良質な医療を提供できるように、職員一丸となって頑張る所存です。今後とも皆様のご理解とご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

病院長 山下 静也